

「非正規・単身・子どもを持たない・中年」 女性の「見えない」困難



花房 吾早子
朝日新聞社 大阪本社
社会部記者

さてっぷでは、現在豊中市のシングル女性の仕事と暮らしをテーマに、調査・研究を進めています。現在女性活躍が国によって推進されていますが、そのイメージからこぼれ落ちる女性たち、それが「非正規・単身・子どもを持たない・中年」の女性たちです。今回寄稿いただいた花房吾早子さんは、取材を通して様々な女性たちの声を私たちに伝えてくれています。

■ 傷つた「女性」像

「女性管理職の増員」「待機児童の解消」「マタハラ防止」……。連日のように「女性」にまつわる課題が報じられています。見聞きするたび、違和感を募らせてきました。

かつては今より、「女性」という一点で団結し、問題を共有しやすかったかもしれません。今は同じ会社に属していても、正規か非正規か、既婚か未婚か、子どもがいるか、介護をしているかなどによって課題が違う。仲間意識を持ちづらくなっているように思います。

そこで登場した「女性活躍推進」。仕事も結婚も出産もと、「活躍せよ」とせかすように聞こえます。ここでイメージされる女性像からこぼれ落ちる女性たち、それが「非正規・単身・子どもを持たない・中年」の女性たちです。

■ 重なる困難

一昨年、「女女格差」をテーマに取材班を立ち上げました。社会が求めるイメージに合致して優遇されていく女性と、その枠にはまらず恩恵を受けられない女性。その格差が広がっているのではないか。親友に話すと、メールが返ってきました。

「産休・育休を取って働く権利は保障されるべきだけど、彼女たちが休む間、非正規の私たちが代わりに働いて、同じ仕事なのに交通費も賞与もなくて、復帰と同時に切られる。こういうことも知ってほしい」

彼女は 42 歳。大学卒業後、正社員として 2 年

半ほど勤め、母の看病をするため退職。再び働き始めてから非正規職を続け、ひとりで暮らしています。今の職場で 4 力所目。長くて 3 年、短いと数カ月で仕事が変わります。父は定年退職して 10 年余り。今は元気ですが、いつ具合が悪くなてもおかしくない年齢です。彼女はひとりっこで、親族は近くにいません。「父の介護で私が仕事を辞めることになったら? 経済的な不安、社会から隔絶される不安がある」

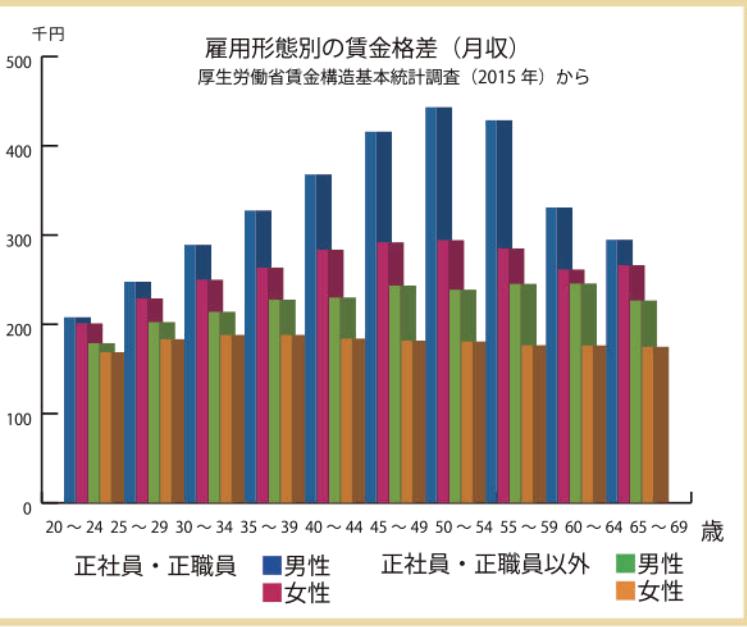
そんな彼女から「横浜市男女共同参画推進協会のアンケートに答えた」と連絡がありました。非正規で働き、独身で子どものいない、35 ~ 54 歳の女性を対象に、年収や雇用期間、現在や将来の悩みを尋ねる調査です。

周りから結婚・出産の圧力を受け、親族から介護の担い手を期待され、人手不足・人件費抑制の進む労働現場を支える「非正規・単身・子どもを持たない・中年」の女性たち。年を重ねるほど求人は減り、昇給もまれ。困窮しても、公営住宅の入居や家賃補助の条件を満たしにくい。短期間で職場を変えたり、同世代は結婚・出産や仕事の昇進などで環境が異なったりと、悩みを共有できる人間関係を築けずにいます。

これまで光の当たらなかった実態が、調査を通して明らかになりました。

■ 『見えない』女性たち

「非正規の女性」と聞くと、将来結婚して夫に養われる若い女性か、夫の収入を補うために働く主



婦を想像しがち。いずれも、女性が自分ひとりの収入で生きることを想定していません。「独身の中年女性」と聞けば、正社員でキャリアを積み、時間やお金に余裕のある印象。実際は、どちらのイメージにもあてはまらない女性たちがいます。

非婚・子どもを持たない人生を選ぶ人は増えているし、家庭に入りたくても、男性も非正規化が進み、「正社員の夫と専業主婦の妻」という高度経済成長期以降のモデルは崩れています。

しかし、いまだ賃金や社会保障の体系は「男性稼ぎ主」が前提。非正規の男性は「妻子を養えない」と問題視されても、女性の場合は「結婚すれば解決する」と見なされてきました。

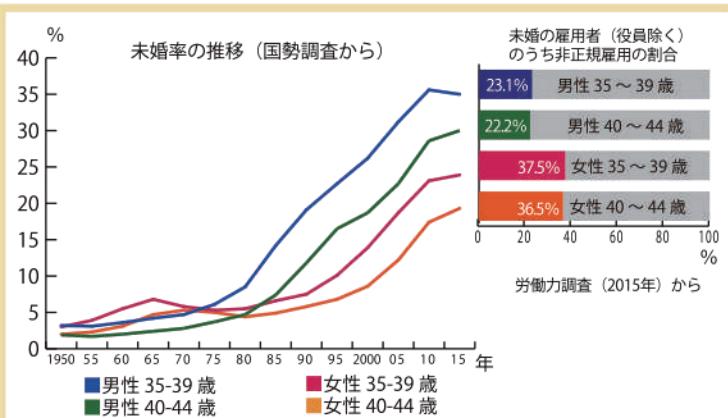
行政が支援の対象として優先するのは、DVや性暴力の被害者、シングルマザー。もちろん支援が必要ですが、わかりにくい困難は置き去りにされがち。私たちメディアの取り上げ方も同じです。女性誌も「専業主婦」「バリキャリ」「ワーママ」を狙ったものばかりです。

朝日新聞では昨年、公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会の調査とそれを受けた支援の方を報じ、さらに広い紙面で「『見えない』女性たち」と題し掲載しました。「まさに私」と切実な体験が寄せられた一方、「自分が選んだことは自分の責任だ」という指摘もありました。

取材した女性たちは多くは、就職氷河期で正規職になれなかったり、病や介護で正規職を離れるを得なかったり、自分の意思を越えた要因で、非正規職を続けていました。外国語、簿記、社会福祉士など、勉強に励んで資格を得た人もいます。「自己責任」との切り捨ては乱暴だし、仮に積極的に選んだ道だとしても、現にある困難を放置してよいのでしょうか。

社会の問題と認識されず、支援の対象と位置づけられなければ、当事者は声を上げづらい。見えないのはいないからではなく、社会が見ようしないからではないでしょうか。

本来、生き方は多様です。性別、世代、雇用形態の違いや家族の有無によって、受けられる社会保障に過度な差が出るべきではないはずです。夫婦や家族といった特定の枠組みしか想定していない制度に対し、一つひとつ疑問を投げかけていきたいです。



花房 吾早子（はなぶさ あさこ）プロフィール

1984年、千葉県生まれ。2008年、朝日新聞社入社。徳島総局で事件事故、高校野球、徳島市政などを担当。長崎総局で県政、原爆被爆者などを主に取材。13年4月から大阪本社社会部。大阪市内の警察署の担当をへて、平和・人権の担当として戦争体験者、性的少数者、障害者、女性といった分野に関心を持ってきた。昨年5月から大阪市役所を担当。現在、市営地下鉄・バスの民営化を中心に、行政課題について取材している。